

令和2年3月26日

平成31年度 地域貢献活動支援報告書

地域イノベーション推進機構長 殿

所 属 教育学部
氏 名 林 朝子

活動テーマ	外国人児童生徒の学びの継続を目指す支援活動 ーキャリア形成につながる大学見学ツアーの実施ー
実施期間	平成31年5月1日 ～ 令和2年3月13日
活動内容	<p>(1) 具体的な活動実施内容</p> <p>平成31年8月9日(金)10:00~17:00、津市内外国人生徒23名を対象とした大学見学ツアーを実施した。当日はA~Gの7グループに分かれ、各グループに教育学部2年生1~2名が支援者として入り、大学内を見学した。昨年度に引き続き、人文学部と生物資源学部のオープンキャンパスへの参加を中心とし、その他に、図書館とメイプル館の見学、食堂での昼食体験を実施した。オープンキャンパスではそれぞれの学部の特徴のある研究や授業紹介の中から、中学生の関心に合わせ、視覚的にも理解がしやすいものを支援者である大学生が選び、各グループで見学を行った。人文学部ではフランス語の簡単な授業に参加したり、生物資源学部では実際に様々な肉を見ながら食肉の質について説明を受けたりしており、中学生が大学という場所を具体的に感じている様子が見られた。</p> <p>ツアーには、学校関係者11名(津市内中学校6名、津市教育委員会5名)の参加もあり、ツアー内容を現場教員の視点から確認いただき、ツアー実施中にも支援学生へ声掛けの工夫など具体的な指導もいただくことができた。</p> <p>(2) 地域への貢献(地域の発展・活性化への寄与、広がり)</p> <p>外国人中学生にとって大学という場所は非常に遠い存在であり、イメージすることすら難しい生徒もいるが、今回のツアーでの中学生の表情やつぶやきから、大学という場所に入り、大学生と交流し、大学の研究や教育の一部に触れることに非常に強い関心を持っていることが感じられた。ツアー後の生徒の感想文には「大学生と話せて楽しかった」「大学にすごい興味をもったし、興味をもったおかげで、勉強もがんばって大学に入りたいなって思います」という記述があり、高校進学に留まらず、その次の段階へ進もうという意識も見られた。中学校・教育委員会の先生方からも、このツアー参加は、生徒が将来を考える契機となり、今後の学習に向かう姿勢や意欲にも大きく影響しているという話をいただいた。</p> <p>(3) 共同実施者との連携状況</p> <p>ツアー実施に向けて、津市教育委員会とは数回にわたり連絡を取り合い、過去2年の内容を踏まえ、今年度のツアー内容や大学生の支援の在り方について、検討を行ってきた。当日体調を崩す生徒もおり、大学生には対応が難しい場合には、教育委員会や中学校の先生方に適宜対応いただくなど、中学生、大学生共、安心してツアーに臨むことができた。</p>

(4) 大学の教育・研究成果のかかわり

本年度は教育学部学生2年生8名が支援者として参加した。全員が小中学校の教員を志望している学生である。本ツアーのように実際に外国人生徒と共に過ごす時間は、生徒との交流を通して、彼らの日本語能力の実態や学習へのつまづきを実体験しながら把握するという貴重な機会となっている。学校現場において外国人児童生徒への教育や対応が重視されている現状を鑑み、非常に有意義な学びの機会となっている。

(本活動については、次の報告書で三重大大学の教員養成における外国人児童生徒への教育に関わる実践例として取り上げた。『文部科学省：2019年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業、実施テーマ：先導的な教職科目の在り方に関する研究、主題：外国人児童生徒への理解と指導力を育てる教員養成カリキュラムの検証』報告書 p. 70、71)

(5) イベント等開催実績 (名称, 実施場所, 参加人数等)

【大学見学ツアー】

日時：平成31年8月9日(金) 10:00~17:00

集合場所：東橋内中学校・高茶屋市民センター(バス送迎)

実施場所：三重大学構内

人文学部、生物資源学部、国際交流センター、図書館、メープル館、三翠ホール、食堂

参加人数：外国人生徒23名(1年生9名、2年生9名、3年生5名)

津市内中学校教員6名、津市教育委員会教員5名

三重大学教育学部国語教育コース2年生8名

大学教員2名(教育学部1名、人文学部1名)

(6) これまでの取組みによって得られた具体的な成果について

1. 外国人生徒の学習意欲の向上と維持

実施目的である「中学生のキャリア形成の礎」としての役割を担っていた。生徒等が大学という場所を知り、自身の将来を考える契機となっていた。後日、中学校の先生方からは、生徒の学習に向かう姿勢に変化が見られた様子もうかがうことができた。しかし、今回のツアーが彼らの将来に具体的にどのような形で影響を与えているのかは、長期的な視点で見ていく必要がある。

2. 学生の学校における日本語教育の必要性への理解向上

多文化が進む学校現場では、様々な文化や言語を背景に持つ児童生徒が在籍しており、中には日本語で学習することが困難な児童生徒も散見される。将来教員となる学生には、多文化共生への意識を持ちながら、日本語教育の必要性への理解と日本語指導の基礎力が求められる。本ツアーへの支援参加により、学生自身が学校での生徒の困り感を知り、大学において日本語教育を学ぶ意義をさらに感じ取れる機会となっていた。

3. 教育現場の課題の共有

中学校教員、教育委員会教員との連携を通じ、大学教員が学校現場の様々な課題について知見を得ることができた。

4. 今後のツアー継続

これまでの3回のツアー実施については、費用面でも大学が主体となってきたが、令和3年度より、津市教育委員会が主体となり実施することとなった。令和3

年度は8月8日（土）に実施予定である。
また、今後は他の自治体とも連携し、実施を検討していく予定である。

